ナグ・ハマディで1945年にコプト語で書かれたグノーシスの諸文書が発見されたことにより、グノーシスがキリスト教とは別に発展した考えられるようになったことを考慮すると理解が深まる

a1: another:グノーシスと無関係な記述(その1番目)
a1: objction:グノーシスを一方的に批判する記述(その1番目)
a1: explicit:グノーシスを直接的に主語とする記述(その1番目)
a1: implisit:グノーシスを直接的に主語とない記述(その1番目)

i.1
グノーシスの考えるヌース
根本原質とその周囲した諸形態は「非精神的」であり、「知るはたらきがない」という特徴をもっている

1
かくてわれわれに明らかとなったように、善者の本性は単純で、したがってまた第一位であり

——というのは、すべて第一位ではないものは、単純でないからーー

そして自己の内に何をもの含有しないで、何か一つのものであり、したがって、一者と呼ばれているものの本性も、これと同じものでのでで、

かくて、われわれが一者と言うばあいも、「善者と言うばあいも、同一の本性が意味されているのだと理解されなければならない

つまり、われわれはこのばあいに、かのものについなる規定をもち付加されてはなくて、ただわれわれと言って、可能な限り単純な表そうとしているわけなのである

かくて、それが他者から派生したのでもなく、他者の内にあるのでもなく、またいかなる意味においても複合体ではなく、必然である

それゆえ、別の始原をさらに求める必要はない。これをこそ真っ先に立てて、それからこれの次にヌース、つまり第一義的に直知しているものを、それから第二義的に直知しているものを、少ないものをも置いてはならないのである

i.2
グノーシスは素材について考察する

17
またもし素材だけが取り扱われるのであれば、いったい何がを語れるというのか、素材は何もの存在をも表現しないであろう

18
それでもし、素材は（上位のものに）依うものとして必然的に生成したと言うなら、それは、その必然性は今もなお存続しているはずである

18 なぜなら、もし人々が少ないものを置くならば、知識のあるものは可能態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

24 というのは、もろ人々には、知識のあるものは可能態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

32 なお、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに嘗の仕事なのであり、ヌースから端に送られたロゴス（原理）にほかならないこれは魂をヌースにおいてある程度だけで、ヌースと魂の中間に介在する別種の本性を構成するわけではない

32 なお、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに嘗の仕事なのであり、ヌースから端に送られたロゴス（原理）にほかならない これは魂をヌースにおいてある程度だけで、ヌースと魂の中間に介在する別種の本性を構成するわけではない

32 ヌースにまた、直知するヌースと、直知するこえを直知するヌースとがあるという理由で、ヌースを複数化することもできないであろう

ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに嘗の仕事なのであり、ヌースから端に送られたロゴス（原理）にほかならない これは魂をヌースにおいてある程度だけで、ヌースと魂の中間に介在する別種の本性を構成するわけではない

32 ヌースにまた、直知するヌースと、直知するこえを直知するヌースとがあるという理由で、ヌースを複数化することもできないであろう

なぜなら、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに嘗の仕事なのであり、ヌースから端に送られたロゴス（原理）にほかならない これは魂をヌースにおいてある程度だけで、ヌースと魂の中間に介在する別種の本性を構成するわけではない

32 ヌースにまた、直知するヌースと、直知するこえを直知するヌースとがあるという理由で、ヌースを複数化することもできないであろう

なぜなら、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに嘗の仕事なのであり、ヌースから端に送られたロゴス（原理）にほかならない これは魂をヌースにおいてある程度だけで、ヌースと魂の中間に介在する別種の本性を構成するわけではない

32 ヌースにまた、直知するヌースと、直知するこえを直知するヌースとがあるという理由で、ヌースを複数化することもできないであろう

否、これは、その次の領域においてすら、同様に存在しないであろう

なぜなら、つねに現実態で存在する限界のものは、かつ現実態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

24 というのは、もろ人々には、知識のあるものは可能態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

なぜなら、つねに現実態で存在する限界のものは、かつ現実態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

否、これは、その次の領域においてすら、同様に存在しないであろう

なぜなら、つねに現実態で存在する限界のものは、かつ現実態としてあり、他のものは現実態としてあり、あるいまた知識のないだろうからだ

28 いったいどのようにして、部分的な知識が、全体の知識を、あるいは全体の知識が、部分的な知識を、生むことができるであろうか